

ロシアの「五人組」

(または「強かな一団」、「Могучая кучка」)は、19世紀後半にロシアで活動した民族主義的作曲家グループを指します。彼らはロシア固有の音楽文化を西洋音楽に対抗して確立しようとした人物たちで、当時のロシア音楽の発展に大きな影響を与えました。このグループの中心人物はミライ・バラキレフで、他のメンバーにはアレクサンドル・ボロディン、モデスト・ムソルグスキー、ニコライ・リムスキー＝ニコルサコフ、ツェーザリ・キュイが含まれます。

1. 背景と理念

「五人組」の活動は、19世紀のヨーロッパで民族主義的な動きが音楽や芸術に反映された時代背景と密接に関係しています。彼らは、ロシアの伝統的な音楽(民謡、宗教音楽など)を基盤に、独自の音楽様式を創り出そうとしました。西洋音楽に影響されながらも、その影響を最小限にし、ロシアの民族的アイデンティティを強調した音楽を作り出すことが目標でした。

バラキレフはグループのリーダーであり、他のメンバーに音楽的な指導を行う存在でした。彼はロシアの民謡や民間伝承の要素を取り入れた作曲を推奨し、ロシア音楽の民族主義運動を先導しました。「五人組」は正式な音楽教育を受けた作曲家が少なく、独学で音楽を学んだ人物が多かったため、独創的で革新的な音楽を生み出しました。

メンバー

ミライ・バラキレフ(1837-1910)

ロシアの作曲家、指揮者、ピアニストであり、特に「五人組」(ロシア五人組、Могучая кучка)と呼ばれる作曲家グループの中心人物として知られています。バラキレフはロシア音楽の発展に大きな影響を与え、その理念は彼自身の作品だけでなく、彼の弟子や同時代の作曲家たちにも反映されました。

生涯

幼少期と音楽教育

バラキレフは1837年、ロシアのニジニ・ノヴゴロドで生まれました。彼は幼少期から音楽に触れ、早くから才能を発揮していました。正式な音楽教育は受けていませんでしたが、サンクトペテルブルクで音楽に関心を持ち、当時の有力な音楽家たちと交流を深めました。後にグリンカ(ロシア音楽の父とされる作曲家)の影響を受け、ロシア民族音楽の重要性に目覚めました。

五人組の結成

バラキレフは、アレクサンドル・ポロディン、モデスト・ムソルグスキー、ニコライ・リムスキー＝コルサコフ、ツェーザリ・キューととともに「五人組」を結成し、ロシア音楽の独自性を追求しました。彼らは西欧音楽の影響を受けすぎたロシア音楽に対して反発し、ロシアの民族的な音楽、特に民謡や民族舞踊の要素を取り入れた音楽の創造を目指しました。バラキレフはこのグループのリーダーとして理論的な指導を行い、特に若い作曲家たちに対して影響力を持っていました。

キャリアの転機と晩年

バラキレフのキャリアは順調に見えましたが、1860年代後半から一時的に音楽活動を離れ、宗教的な探求に没頭する時期がありました。しかし1870年代に再び音楽界に復帰し、指揮者としても活躍しました。晩年にはロシア音楽協会や宮廷礼拝堂の音楽監督を務め、ロシア音楽界の指導者として活動を続けました。バラキレフは作曲家として多くの作品を残していますが、彼の影響は作曲活動だけにとどまらず、教育者や音楽指導者としての役割も非常に重要でした。彼の音楽はロシア民族音楽の要素を取り入れたものが多く、特に民謡の旋律やリズムを活かした作品が特徴的です。

1. 管弦楽曲

- **交響詩『イスラメイ』**:これはバラキレフの最も有名なピアノ作品で、難易度の高い技巧を要求することでも知られています。ロシアのコーカサス地方の舞曲や民族的な要素を反映した作品です。

- **交響曲 第1番 ハ短調**:この作品は、完成に長い時間がかかりましたが、バラキレフの民族音楽へのこだわりが反映された作品です。
- **序曲『ルスランとリュドミラ』**:この作品は格林カのオペラに基づいた序曲で、バラキレフの初期の管弦楽作品の一つです。

2. ピアノ作品

- **ピアノソナタ 変ロ短調**:複雑な和声と高い技巧を要求する作品です。
- **『東洋幻想曲 イスラメイ』**:彼の最も有名なピアノ作品で、コーカサス地方の音楽から着想を得ており、技巧的に非常に難しい曲です。

3. 歌曲

- バラキレフは多くのロシア民謡を編曲し、それに基づく歌曲も多く残しています。これらの歌曲では、ロシアの民謡旋律を洗練させつつ、感情豊かに表現しています。

4. その他

- バラキレフは民族舞曲や室内楽、合唱曲などのジャンルにも作品を残していますが、彼の管弦楽曲やピアノ作品が最も評価されています。

作風

バラキレフの作風は、ロシア民族主義とロマン派音楽の要素を融合させたもので、特に格林カの影響を強く受けています。彼の音楽には民謡の要素が取り入れられており、ロシアの風景や文化が感じられるものが多いです。また、非常に技巧的で、特にピアノ作品では高い演奏技術が求められます。

影響と遺産

バラキレフの音楽は、彼自身の作品を超えて、多くの作曲家に影響を与えました。彼の教えを受けた作曲家には、リムスキー＝ニコルサコフやムソルグスキーが含まれ、彼らの作風にもバラキレフの民族主義的なアプローチが反映されています。バラキレフの思想や理念は、ロシア音楽のアイデンティティを確立する上で重要な役割を果たしました。

バラキレフの音楽は、他の五人組の作曲家たちと比べると演奏される機会が少ないかもしれませんが、彼の影響はロシア音楽の発展において計り知れないものがあります。

代表作:

- 《タマーラ》: 交響詩で、カフカースの山々を舞台にした幻想的な物語に基づく作品。
- 《イスラメイ》: ピアノのための幻想曲で、非常に技巧的で知られる作品です。

ミリイ・バラキレフ(Mily Alexeyevich Balakirev, 1837年 - 1910年)は、ロシアの作曲家、指揮者、ピアニストであり、特に「五人組」(ロシア五人組、М о г у ч а я к у ч к а)と呼ばれる作曲家グループの中心人物として知られています。バラキレフはロシア音楽の発展に大きな影響を与え、その理念は彼自身の作品だけでなく、彼の弟子や同時代の作曲家たちにも反映されました。

五人組の結成

バラキレフは、アレクサンドル・ボロディン、モデスト・ムソルグスキー、ニコライ・リムスキーニコルサコフ、ツェーザリ・キューイとともに「五人組」を結成し、ロシア音楽の独自性を追求しました。彼らは西欧音楽の影響を受けすぎたロシア音楽に対して反発し、ロシアの民族的な音楽、特に民謡や民族舞踊の要素を取り入れた音楽の創造を目指しました。バラキレフはこのグループのリーダーとして理論的な指導を行い、特に若い作曲家たちに対して影響力を持っていました。

キャリアの転機と晩年

バラキレフのキャリアは順調に見えましたが、1860年代後半から一時的に音楽活動を離れ、宗教的な探求に没頭する時期がありました。しかし1870年代に再び音楽界に復帰し、指揮者としても活躍しました。晩年にはロシア音楽協会や宮廷礼拝堂の音楽監督を務め、ロシア音楽界の指導者として活動を続けました。

バラキレフは作曲家として多くの作品を残していますが、ロシア民族主義とロマン派音楽の要素を融合させたもので、特にグリンカの影響を強く受けています。彼の影響は作曲

活動だけにとどまらず、教育者や音楽指導者としての役割も非常に重要でした。彼の音楽はロシア民族音楽の要素を取り入れたものが多く、特に民謡の旋律やリズムを活かした作品が特徴的です。ピアノ作品では高い演奏技術が求められます。

影響と遺産

バラキレフの音楽は、彼自身の作品を超えて、多くの作曲家に影響を与えました。彼の教えを受けた作曲家には、リムスキー＝ニコルサコフやムソルグスキーが含まれ、彼らの作風にもバラキレフの民族主義的なアプローチが反映されています。バラキレフの思想や理念は、ロシア音楽のアイデンティティを確立する上で重要な役割を果たしました。

バラキレフの音楽は、他の五人組の作曲家たちと比べると演奏される機会が少ないかもしれませんが、彼の影響はロシア音楽の発展において計り知れないものがあります。

アレクサンドル・ボロディン(1833-1887)

生涯と思想

ボロディンは化学者としても活動していましたが、作曲家としても高く評価されました。彼の音楽はロシアの民謡や伝統を取り入れ、力強くドラマティックな要素を持っています。彼はロシア音楽の民族的なアイデンティティを音楽に反映させることに力を入れました。ボロディンはサンクトペテルブルクで、貴族と下層階級の女性との間に生まれましたが、彼の出生は非嫡出子だったため、父親の姓を名乗ることはできませんでした。彼は早い段階で科学に興味を持ち、特に化学や医学に関心を示しました。音楽にも幼少期から触れており、ピアノやフルートなどを学びました。ボロディンは化学を専門とし、後にサンクトペテルブルクの医科大学で有機化学の教授として勤めました。彼の化学における研究は、特にアルデヒドの合成や有機化合物に関する研究で知られています。音楽活動は彼にとって副業のようなものであり、彼の化学の仕事が多忙なために、作曲活動は断続的に行われていました。1850年代後半、ボロディンは音楽の道をさらに本格的に進む決心をし、1860年代にミライ・バラキレフと出会いました。バラキレフは「ロシア五人組」のリーダーとしてボロディンに大きな影響を与え、彼はロシア民謡や民族的テーマを音楽に取り入

れる作曲家としての道を進むこととなります。ボロディンは作曲においても、民族的な音楽要素を取り入れることに努め、特にオペラや交響曲でロシアの物語や風景を描写しました。しかし、彼は科学者としてのキャリアが優先されることが多く、作品を完成させることが難しかったこともあり、いくつかの作品は未完に終わっています。1887年、彼は心臓発作により53歳で急逝しました。彼の突然の死は、彼の多くのプロジェクトを未完のままにしましたが、彼の友人であったリムスキー＝ニコルサコフやグラズノフが、彼の未完の作品を補完し出版しました。

- **交響曲第1番 変ホ長調**(1862-1867年) ボロディンの交響曲第1番は、彼の最初の大規模なオーケストラ作品で、ロシア民謡の要素を大胆に取り入れています。伝統的な西欧の形式を使用しながらも、独自のロシア的な響きを持つこの作品は、ロシア音楽に新たな方向性を示しました。
- **交響曲第2番 ロ短調**(1869-1876年) ボロディンの交響曲第2番は、最も有名な作品の一つであり、しばしば「英雄的交響曲」とも呼ばれます。力強く、リズムカルなテーマとドラマティックな展開が特徴で、ロシアの歴史や民族的な要素を強く反映しています。
- **交響曲第3番 イ短調**(1882-1887年、未完) この作品は未完成のままであり、ボロディンの死後にリムスキー＝ニコルサコフとグラズノフによって補完されました。
- **オペラ『イーグリ公』**
ボロディンの代表的なオペラであり、彼の生涯最大のプロジェクトでしたが、彼の死によって未完に終わりました。このオペラは、12世紀のロシアの公イーグリが、遊牧民ポロヴェツ族と戦う物語を描いています。特に第2幕の**「ポロヴェツ人の踊り」**は非常に有名で、オーケストラ作品としても単独で演奏されることが多いです。リムスキー＝ニコルサコフとグラズノフによって補完され、今日でもロシアオペラの傑作とされています。
- **3. 弦楽四重奏**
ボロディンは弦楽四重奏曲を2曲作曲していますが、その中でも特に有名なものが**弦楽四重奏曲第2番**です。この作品は彼の最もロマンティックな作品の一つであり、第3楽章の「ノクターン」は特に人気が高く、様々な楽器編成で編曲され演奏されています。

ピアノ曲や小品

ボロディンは交響曲やオペラの大作に加えて、いくつかのピアノ小品や室内楽作品も作曲しました。彼のピアノ作品は少ないですが、どれもメロディアスでロシア的な響きを持っています。

- 「小さな組曲」:ピアノのための組曲で、民謡のメロディーや軽やかな舞曲を取り入れています。

5. 歌曲

ボロディンは多くのロシア歌曲(ロマンス)を作曲しています。彼の歌曲は、ロシアの自然や感情を描写するものが多く、抒情的で繊細な美しさが特徴です。

- 「この歌を、歌わないでくれ」:抒情的で悲しげな美しさを持つロシア歌曲の一つ。

ボロディンの影響と評価

アレクサンドル・ボロディンは、作曲家としても科学者としても重要な功績を残しました。彼の音楽は、ロシアの民族的な要素を西洋音楽の形式に統合し、その力強い旋律と独特の色彩感覚が後のロシア音楽に大きな影響を与えました。特に、彼の弟子であるリムスキーニコルサコフや、リムスキーニコルサコフの弟子であるストラヴィンスキーなどの作曲家に受け継がれました。

彼の化学者としてのキャリアも素晴らしく、二つの分野で成功を収めた彼は、ロシア文化に多大な貢献をした人物として尊敬されています。

モデスト・ムソルグスキー(1839-1881)

ロシアの作曲家で、「ロシア五人組」の一員として知られています。彼はロシア民族音楽の発展に大きな役割を果たし、特にロシアの民俗音楽や民間伝承に強く影響を受け

た作風を持っています。ムソルグスキーの音楽は、伝統的な西欧の音楽形式とは異なる独自のスタイルで、ロシアの歴史や文化、精神性を描写することに力を入れました。

幼少期と家族背景

ムソルグスキーはロシアの裕福な地主の家庭に生まれました。彼の家族は音楽に対して強い関心を持っており、幼い頃から彼はピアノを学び始めました。6歳でピアノのレッスンを受け、すぐにその才能が認められました。

12歳の時、彼はサンクトペテルブルクの貴族学校に入学し、将来は軍人になることを目指しましたが、音楽への情熱は消えませんでした。特に彼の家族が所有していた領地で、ロシアの農民や農民の歌に接する機会が多かったことが、彼の音楽的スタイルに強い影響を与えました。

軍隊生活と音楽活動

1852年、ムソルグスキーはサンクトペテルブルクの近衛士官学校に進学し、軍人としての道を歩み始めました。しかし、その後、彼は作曲家としての活動に専念するようになります。彼は1860年代にミリイ・バラキレフをはじめとする「ロシア五人組」と出会い、彼らと共にロシア民族音楽の発展に取り組むようになりました。

1863年に軍を辞め、音楽活動に専念しましたが、生活は困難を極めました。ムソルグスキーはその後、公務員として働きながら作曲を続けました。しかし、精神的な不安やアルコール依存に苦しむようになり、彼の創作活動にも影響を与えることとなります。

晩年と死

1870年代にムソルグスキーの健康は悪化し、特にアルコール中毒が進行しました。この頃、彼の音楽的な成功は限られており、経済的にも苦しい状況が続いていました。彼の健康状態はさらに悪化し、1881年、42歳で亡くなりました。彼の多くの作品は未完であり、後に友人や同僚が補完や編曲を行いました。

主な作品とその特徴

ムソルグスキーの作品は、その斬新な和声や旋律、特にロシアの民俗音楽を取り入れた大胆な作曲技法が特徴です。彼は伝統的な形式にとらわれず、独自の視点でロシアの生活や歴史を描写しました。

1. オペラ『ボリス・ゴドゥノフ』

ムソルグスキーの最も有名な作品で、ロシアの歴史を題材にしたオペラです。16世紀末のロシアのツァーリ、ボリス・ゴドゥノフの治世とその苦悩を描いています。作品は1869年に初めて完成しましたが、初演を拒否され、その後何度か改訂されています。ムソルグスキーのリアリズムと人間の感情の深さを反映した作品で、特に民衆の描写や合唱部分が非常に力強く、オリジナリティ溢れる表現で知られています。

2. 組曲『展覧会の絵』

ムソルグスキーのピアノ組曲『展覧会の絵』は、彼の友人であった画家ヴィクトル・ハルトマンの作品展を見た後にインスピレーションを受けて作曲されたものです。10の絵を音楽で描写しており、各楽章が異なる絵画や彫刻に対応しています。この作品はピアノ版として作曲されましたが、後にモーリス・ラヴェルによってオーケストラ編曲され、そのバージョンが最も広く知られています。

1. プロムナード (Promenade)

内容: 展覧会を巡り歩くムソルグスキー自身を象徴したテーマです。五拍子の不規則なリズムが特徴で、音楽は画と画の間を歩く様子を表現しています。プロムナードは組曲全体に5回登場し、各画の間をつなぐ役割を果たしています。

解説: 荘重なテーマが何度も登場し、ムソルグスキーが展覧会の各絵を鑑賞しながら会場を歩いている様子を表現しています。

2. グノーム (Gnomus)

内容:ハルトマンがデザインした「怪物じみた形のナッツ割り人形」を表現した曲。ひねくれた、歪んだ形の小さなグノーム(小人)が不器用に動く様子が描かれています。

音楽的特徴:短いフレーズや不規則なリズムが使われ、小さなグノームが動く不安定さや歪んだ感じが表現されています。突発的な強弱の変化も特徴です。

3. 古城 (Il Vecchio Castello)

内容:廃墟となった中世の城の前で吟遊詩人が歌っている場面を描写。ムソルグスキーの心象風景が強く反映されています。

音楽的特徴:全体的に哀愁漂う旋律が特徴で、左手のアルペジオが落ち着いた雰囲気を作り出し、吟遊詩人の哀歌が旋律的に流れます。穏やかな哀愁が漂う情景描写が印象的です。

4. テュイルリーの庭 (Tuileries (Dispute d'enfants après jeux))

内容:パリのテュイルリー公園で遊ぶ子供たちの喧嘩や騒々しさを表現しています。ハルトマンが描いたこのシーンは、子供たちが遊び場で騒ぐ様子を捕らえています。

音楽的特徴:軽快でおしゃべりなリズムとメロディーが、子供たちの無邪気で賑やかな遊びを描写しています。短いフレーズが絶えず入れ替わり、子供たちの活発な様子が音楽で描かれています。

5. ビドロ (Bydło)

内容:ポーランドの農村で、巨大な牛車がゆっくりと進む様子を表現しています。ハルトマンが描いた農村のシーンから着想を得ています。

音楽的特徴:低音域で重々しく、徐々に音量が増していき、牛車が近づいてくる様子が描かれています。曲が進むと、車が通り過ぎて遠ざかっていくように音楽がフェードアウトしていきます。

6. 卵の殻をつけた雛のバレエ (Ballet des poussins dans leurs coques)

内容:ハルトマンがデザインした卵の殻をかぶった雛の衣装を基にしています。殻を破ったばかりの雛が、ヨチヨチとバレエを踊るように動く様子が描かれています。

音楽的特徴:軽快で跳ねるようなリズムが特徴で、可愛い雛たちの動きや跳ね回る様子が音楽で表現されています。短いフレーズと急なテンポの変化が、雛たちの不安定な動きを表しています。

7. サミュエル・ゴールデンベルクとシュムイレ (Samuel Goldenberg und Schmuyle)

内容:2人のユダヤ人、裕福なサミュエル・ゴールデンベルクと貧しいシュムイレの対話を描写。ハルトマンのデッサンに基づいた作品で、対照的な人物像が描かれています。

音楽的特徴:サミュエル・ゴールデンベルクのテーマは威厳と力強さがあり、シュムイレは弱々しく不安定なリズムで表現されます。二人の性格の違いが対比されるように、旋律とリズムが対照的です。

8. リモージュの市場 (Limoges. Le Marché (La Grande Nouvelle))

内容:リモージュの市場での賑やかな様子を描写。ハルトマンのデザインに触発され、マーケットでの商人たちのやり取りや、雑踏の中の喧騒が表現されています。

音楽的特徴: 速いテンポと賑やかな音の連なりが、市場の活気や人々の騒がしさを表現しています。急激な強弱や短いフレーズのやり取りが、忙しい市場の様子を描き出しています。

9. カタコンブ(ローマの墓) (Catacombae (Sepulcrum Romanum))

内容: ハルトマンが描いたパリのカタコンブ(地下墓地)を表現した曲です。静寂で神秘的な雰囲気が漂い、死を象徴しています。

音楽的特徴: 荘厳で深い響きが特徴で、低音の和音と重厚な旋律が墓所の静けさと恐ろしさを表現しています。ムソルグスキー自身が死を前にした心象風景が反映されているとも言われています。

10. 鶏の足の上の小屋 (Baba Yaga)

内容: ロシアの民話に登場する魔女ババ・ヤガの小屋を描写。ババ・ヤガは鶏の足の上に建てられた不気味な小屋に住んでおり、この曲では彼女が空を飛ぶ場面を音楽で表現しています。

音楽的特徴: 急速なリズムと不安定な旋律がババ・ヤガの激しさと不気味さを表現しています。飛翔するような速いパッセージが特徴で、魔女の恐ろしさを強調しています。

11. キエフの大門 (The Bogatyr Gates (In the Capital in Kiev))

内容: ハルトマンが設計した壮大なキエフの大門を描写。ロシアの英雄的な歴史を象徴する堂々とした門のイメージが音楽で描かれています。

音楽的特徴: 荘厳で堂々とした旋律が大門の威厳を表現しており、フィナーレにふさわしい力強い曲です。繰り返される重厚なテーマと鐘の音が、英雄的な雰囲気を高めています。

「展覧会の絵」は、それぞれの曲が異なる絵画やデザインに触発されており、ムソルグスキーの色彩豊かな音楽的表現力が存分に発揮された作品です。それぞれの曲が独自の物語や情景を描写しており、組曲全体として一つの展覧会を巡る旅のような体験を提供します。

3. 歌曲集『死の歌と踊り』

ムソルグスキーは多くのロシア歌曲を作曲しましたが、中でも**『死の歌と踊り』**は非常に強い印象を残す作品です。この歌曲集は、死のイメージをさまざまな角度から描写した4つの歌曲で構成されています。それぞれ異なるキャラクターが登場し、死との対話や葛藤が描かれています。ムソルグスキーの独特な和声進行とリズムの使用が、この作品の劇的な雰囲気を強めています。

4. 『ホヴァーンシチナ』

未完のオペラ『ホヴァーンシチナ』は、17世紀のロシアの政治的な混乱と改革を題材にしています。ムソルグスキーはこの作品を生前に完成させることができませんでしたが、後にリムスキー＝ニコルサコフやショスタコーヴィチなどの作曲家が補完し、上演されています。

5. 交響詩『禿山の一夜』

この作品は、ムソルグスキーの最も有名な交響詩の一つであり、スラヴ神話に基づいて描かれた恐怖の夜を表現しています。魔女たちが禿山で集まり、夜中に悪魔を召喚するという情景を描いており、激しいリズムと不気味な和音が特徴です。リムスキー＝ニコルサコフが後に編曲し、現在最も広く演奏される版となっています。

6. ピアノ小品

ムソルグスキーはピアノ小品もいくつか作曲していますが、彼の主要な作品ほど多くはありません。彼のピアノ音楽は、独特のリズムとメロディーが特徴的で、民族音楽の要素を取り入れています。

ムソルグスキーの影響と評価

ムソルグスキーは、彼の同時代の作曲家たちと比べても、非常に独自のスタイルを持つ作曲家として評価されています。彼の作品は、形式的な整合性や伝統的な技術よりも、感情や物語を直接的に伝えることを重視しており、その大胆な和声やリズムは、後の多くの作曲家に影響を与えました。

特に彼のリアリズムの追求と、ロシアの民俗音楽を音楽に取り入れた先駆的なスタイルは、ロシア音楽の発展に大きく寄与しました。彼の作品は後に、リムスキー＝ニコルサコフやラヴェルなどの作曲家によって編曲され、より広く知られるようになりました。

ニコライ・リムスキー＝ニコルサコフ(1844-1908)

リムスキー＝ニコルサコフは、グループの中で最も音楽教育を受けた人物であり、後に音楽教育者としても活躍しました。彼の作品は、特にオーケストレーションの技術が高く評価されています。彼は、ロシア民謡や東洋的な音楽要素を取り入れ、絢爛なオーケストラサウンドを特徴としています。

リムスキー＝ニコルサコフはロシア帝国の裕福な貴族家庭に生まれ、幼少期から音楽教育を受けましたが、当初は海軍に進むことを志しました。1856年にサンクトペテルブルクの海軍士官学校に入学し、そこで教育を受ける一方で音楽にも興味を持ち続けました。

1862年に海軍士官として勤務しながら、作曲家のミライ・バラキレフと出会い、音楽の指導を受け始めました。バラキレフを中心とするロシア五人組(バラキレフ、ムソルグスキー、キューイ、ポロディン、リムスキー＝ニコルサコフ)は、ロシア民族音楽の発展を目指し、リムスキー＝ニコルサコフもその一員として活動を始めました。

初期のキャリアと音楽教育者としての役割

リムスキー＝ニコルサコフは、1865年に交響曲第1番を発表し、ロシアにおいて最初の「ロシア人による交響曲」として評価されました。海軍の勤務を続けながらも、作曲活動に専念し、徐々に作曲家としての地位を確立していきました。

1871年、彼はサンクトペテルブルク音楽院の教授に任命され、独学で培った音楽知識を学生たちに教え始めました。この時期、彼自身も音楽理論や和声、対位法について学び直し、教えながら自らも成長していきました。彼の教育は、後に多くのロシアの作曲家たちに影響を与え、20世紀のロシア音楽の発展に大きく貢献しました。

作曲活動とオーケストレーションの技術

リムスキー＝ニコルサコフは、特にオーケストレーションにおいて非凡な才能を発揮しました。彼の作品は色彩豊かなオーケストレーションが特徴であり、後にモーリス・ラヴェルやイーゴリ・ストラヴィンスキーなどの作曲家に大きな影響を与えました。リムスキー＝ニコルサコフは、友人であり「ロシア五人組」の仲間であったムソルグスキーやボロディンの未完の作品を編曲・補完する役割も果たしています。

晩年と死

リムスキー＝ニコルサコフは、1905年のロシア革命に対して反対し、皇帝への抗議の声を上げました。これにより、彼の作品が一時的に禁止されることもありました。その後、再び活動を再開しました。晩年は指揮者としても活躍し、サンクトペテルブルクでの音楽活動に積極的に参加しました。彼は1908年に亡くなり、ロシア音楽史における偉大な作曲家としての地位を確立しました。

交響組曲『シェヘラザード』：Op. 35

リムスキー＝ニコルサコフの最も有名な作品の一つで、アラビアンナイトの物語を題材にした4楽章の交響組曲です。作品は色彩豊かなオーケストレーションで知られ、特にヴァイオリンのソロが重要な役割を果たしています。物語の主人公シェヘラザードが、

毎晩王に新しい物語を語り続けるという設定に基づき、各楽章が異なるエピソードを描いています。

- 第1楽章「海とシンドバッドの船」: 荒れ狂う海の描写と冒険が描かれます。
- 第2楽章「カラダール王子の物語」: 東洋的な旋律が特徴的です。
- 第3楽章「若い王子と王女」: ロマンティックで優美な旋律が印象的。
- 第4楽章「バグダッドの祭り、海、難破」: ダイナミックな終楽章で、壮大なクライマックスを迎えます。

交響詩『スペイン奇想曲』: Op. 34

この作品は、スペインの民族舞踊や旋律を題材にした交響的作品で、リムスキー＝ニコルサコフのオーケストレーション技術の高さが際立っています。各楽章は独立した舞曲のような性格を持っており、スペインの風土や文化を色彩豊かに描写しています。

交響詩『サルタン皇帝の物語』から「くまばちの飛行」

オペラ『サルタン皇帝の物語』の一部として作曲された「くまばちの飛行」は、速いテンポで演奏される軽快な作品で、くまばちが飛び回る様子を音楽で描写しています。この作品は非常に有名で、しばしばピアノや他の楽器のために編曲されています。

オペラ『サトコ』 Op. 57

このオペラは、ロシアの民間伝承を題材にしており、豪華なオーケストレーションとドラマティックな展開が特徴です。主人公サトコが冒険し、恋に落ち、試練を乗り越える物語が描かれています。

5. オペラ『金鶏』

リムスキー＝ニコルサコフの晩年の作品で、プーシキンの詩を基にした寓話的なオペラです。作品はロシアの専制政治や社会への風刺が込められており、その斬新なテーマと音楽的な表現が高く評価されています。

6. 交響曲第2番『アンタール』 Op. 9

この交響曲は、アラビアの英雄アンタールの物語に基づいており、異国情緒に満ちた旋律とリズムが特徴的です。リムスキー＝ニコルサコフはロシアだけでなく、東洋の音楽や文化にも興味を持ち、その影響がこの作品に色濃く反映されています。

7. 管弦楽作品『ロシアの復活祭序曲』 Op. 36

この作品は、ロシアの正教会の復活祭を題材にしており、教会音楽や聖歌を基にした荘厳な楽曲です。作品全体を通じて、厳粛な宗教的な雰囲気と祝祭の喜びが対照的に描かれています。

リムスキー＝ニコルサコフの音楽的影響

リムスキー＝ニコルサコフは、オーケストレーションの天才として広く評価されており、彼の色彩豊かな音楽は、後のロシア作曲家や世界中の作曲家に大きな影響を与えました。彼の弟子には、イーゴリ・ストラヴィンスキーやセルゲイ・プロコフィエフなど、20世紀の音楽史において重要な役割を果たした作曲家が含まれています。

ツェーザリ・キュイ(1835-1918)

ロシアの作曲家、音楽評論家、軍事技術者でした。彼は、ミイ・バラキレフを中心とする「ロシア五人組」の一員で、ロシアの民族音楽を推進するグループに貢献しました。キュイは作曲活動だけでなく、音楽評論家としても活躍し、19世紀のロシア音楽の発展において重要な役割を果たしましたが、彼自身の作品は他の五人組のメンバーほど広く知られていません。

幼少期と教育

キュイは、フランス系の父親とロシア系の母親のもと、ロシア帝国のヴリナ(現在のロシアのヴリニヌス)で生まれました。彼の父はフランス軍に所属しており、ナポレオン戦争の後、ロシアに定住しました。キュイは家庭内でフランス語が話されており、フランス文化に影響を受けて育ちました。

若い頃からピアノを学び、音楽に興味を持ちましたが、彼の両親は音楽家としてのキャリアを支持しませんでした。そのため、彼はサンクトペテルブルクの軍事技術学校で工学を学び、軍事技術者としての道を進むことになりました。彼は要塞の建設や防衛に関する専門家としての地位を確立し、ロシア陸軍の中で優れた技術者として名を馳せました。

音楽活動と「ロシア五人組」

キュイは1850年代にサンクトペテルブルクでミレイ・バラキレフと出会い、その後「ロシア五人組」(バラキレフ、ムソルグスキー、ボロディン、リムスキー＝ニコルサコフ、キュイ)の一員となりました。五人組は、ロシアの民族音楽の要素を取り入れ、西欧音楽の影響から離れた独自のロシア音楽を発展させることを目指していました。

キュイは作曲家として活動を始め、特にオペラや室内楽、歌曲などで知られるようになりましたが、彼の本業は軍事技術者であり、そのため音楽活動は他のメンバーに比べて副業的な側面がありました。それでも、彼は熱心に音楽評論を書き、**ロシアの音楽評論家**として多くの評論を発表し、ロシア音楽の発展を擁護しました。彼は特にバラキレフやムソルグスキー、リムスキー＝ニコルサコフなどの作品を支持し、彼らの音楽を紹介するための評論活動を行いました。

晩年と死

キュイは生涯にわたり軍事技術者としてのキャリアを維持し、ロシア帝国の要塞防衛に関する書籍を執筆するなど、専門家としても高い評価を受けていました。音楽活動は主に趣味の範囲で行われましたが、その影響力は大きく、特に彼の音楽評論がロシア音楽界における重要な役割を果たしました。

彼は1918年、サンクトペテルブルクで83歳で亡くなりました。キュイの死後、彼の作品は他の「ロシア五人組」のメンバーほどは演奏されなくなりましたが、彼の音楽評論とロシア音楽の擁護者としての功績は今も評価されています。

キュイの主な作品

キュイは多くのジャンルで作曲しましたが、特にオペラ、室内楽、歌曲が中心です。彼の作品は、ロシア民謡やロシアの歴史に題材を取るものが多く、五人組の他のメンバーと

同様、ロシアの民族色を反映した作品が多いです。しかし、キュイの音楽は、他のメンバーに比べると西欧音楽の影響を強く受けています。

1. オペラ

キュイは数多くのオペラを作曲しましたが、その多くは今日ではあまり演奏されません。それでも、彼のオペラ作品には、彼の作曲技法とロシアの民族主義的なテーマが反映されています。

- 『囚われのカフカス人』 Op. 30 (1857-1858): プーシキンの詩に基づいたオペラで、キュイの初期の代表作です。この作品は、ロシアとカフカス地方の文化的な衝突を描いています。
- 『ウィリアム・ラトクリフ』 Op. 31 (1861-1869): ヴァルター・スコットの詩に基づいたオペラで、キュイのオペラ作品の中でも特に劇的な作品です。
- **『フラミア』 (1897): コメディタッチのオペラで、軽快な音楽とストーリーが特徴です。

2. 歌曲

キュイは約 300 曲の歌曲を作曲しており、その多くはロシアの詩人の詩に基づいています。彼の歌曲は、ロシアの情緒を繊細に表現したものが多く、感情豊かな旋律と詩的な表現が特徴です。

- 『孤独』 Op. 73: ロシアの詩人の詩に基づいた歌曲で、孤独感と内面的な葛藤を表現しています。
- 『夏の夜』: 繊細な抒情性を持ち、自然の情景と人間の感情を結びつけた美しい歌曲です。

3. ピアノ音楽

キュイのピアノ作品は、ロマン派の影響を受けており、華麗な技法と感情豊かな表現が特徴です。彼のピアノ曲は、特に小品や抒情的な性格を持つ作品が多く、演奏家に技術と感情の両方を要求します。

- 『25の前奏曲』 Op. 64: 短いが個性的な前奏曲のセットで、各曲が独自の性格を持っています。
- ピアノソナタ Op. 61: 彼のピアノ作品の中でも特に構成がしっかりしており、技巧的な要素が際立つ作品です。

4. 室内楽

キュイの室内楽作品は、ロマン派音楽の影響を受けながらも、彼の独自の個性が光るものが多いです。特に弦楽四重奏やピアノと弦楽器のための作品が知られています。

- **弦楽四重奏曲**: 彼の弦楽四重奏曲は、西欧のロマン派音楽の影響を強く受けており、調和の取れた和声と旋律が特徴です。
- **ピアノ五重奏曲**: ピアノと弦楽器の対話を中心とした作品で、華麗な旋律と複雑なアンサンブルが印象的です。

5. 管弦楽曲

キュイは管弦楽曲も作曲しましたが、彼のオーケストラ作品は他の「五人組」のメンバーほど大規模ではありません。それでも、いくつかの作品はオーケストレーションの巧みさが評価されています。

- **組曲『ミニアチュール』**: 短い管弦楽作品のセットで、各曲が異なる情景を描写しています。
- **交響詩『タラス・ブーリバ』**: ロシア文学に基づいた作品で、ドラマティックな展開と民族的な要素が特徴です。

キュイは、もともと軍事技師としてのキャリアを歩んでいた人物ですが、音楽批評家や作曲家としても活動しました。彼の作品は、主にオペラや歌曲が中心で、ロシアの詩や文学に基づいたものが多いです。キュイの作風は、西洋の伝統的な形式に近いとされ、五人組の中ではやや保守的な作曲家と見なされていました。

- **五人組の思想と影響**
- 五人組の音楽活動の根底には、ロシア音楽のアイデンティティを確立し、西洋音楽の影響を排除して、ロシア固有の音楽を創り出すという目標がありました。彼ら

は、ロシア民謡や民族舞踊、歴史的題材を積極的に作品に取り入れ、形式主義を排し、より自然で感情豊かな音楽表現を追求しました。

- 彼らの思想は後のロシア音楽に大きな影響を与え、特にリムスキー＝ニコルサコフの弟子であるストラヴィンスキーやラフマニノフ、スクリャービンといった作曲家たちに受け継がれていきました。
- 五人組は、個々の作曲家が異なるキャリアを持ち、それぞれの作品に独自の特色を持っていますが、共通するテーマはロシアの民族主義的な音楽を発展させることでした。そのため、彼らの影響はロシア国内だけでなく、世界中のクラシック音楽に広がっています。